

まけるな^{けん}健

大野哲郎



■ 紹介

大野哲郎（おおの・てつろう）

著書に「港の見える町」「山ん神の次郎」の
うさぎとかあさん」（以上ポプラ社）、「ふ
さとのなぞ」（毎日新聞社）。放送作品に「ノ
ブさん」（一九六三年度最優秀作入賞）、「昭
夫の日記」（一九七九年度から現在放送中・
以上NHK）他がある。

現住所 神奈川県茅ヶ崎市松林一―三―一

稲川弘明（いながわ・ひろあき）

一九三九年東京に生まれる。東京芸術大学工
芸科卒業。工業デザイナーとして活躍のかた
わらイラストレーションをてがける。

現住所 東京都世田谷区松原四―一七―二〇

NDC 913

まけるな健

一九八二年一〇月二五日 第一刷発行

著 者

おおの てつろう
大野 哲郎

発行者

小峰 広恵

発行所

株式会社 小峰書店

東京都新宿区舟町六 一六〇

電話 三三三七一五三 振替東京六一九五五四

組 版 国際文化交易株式会社

本文印刷 株式会社 厚德社

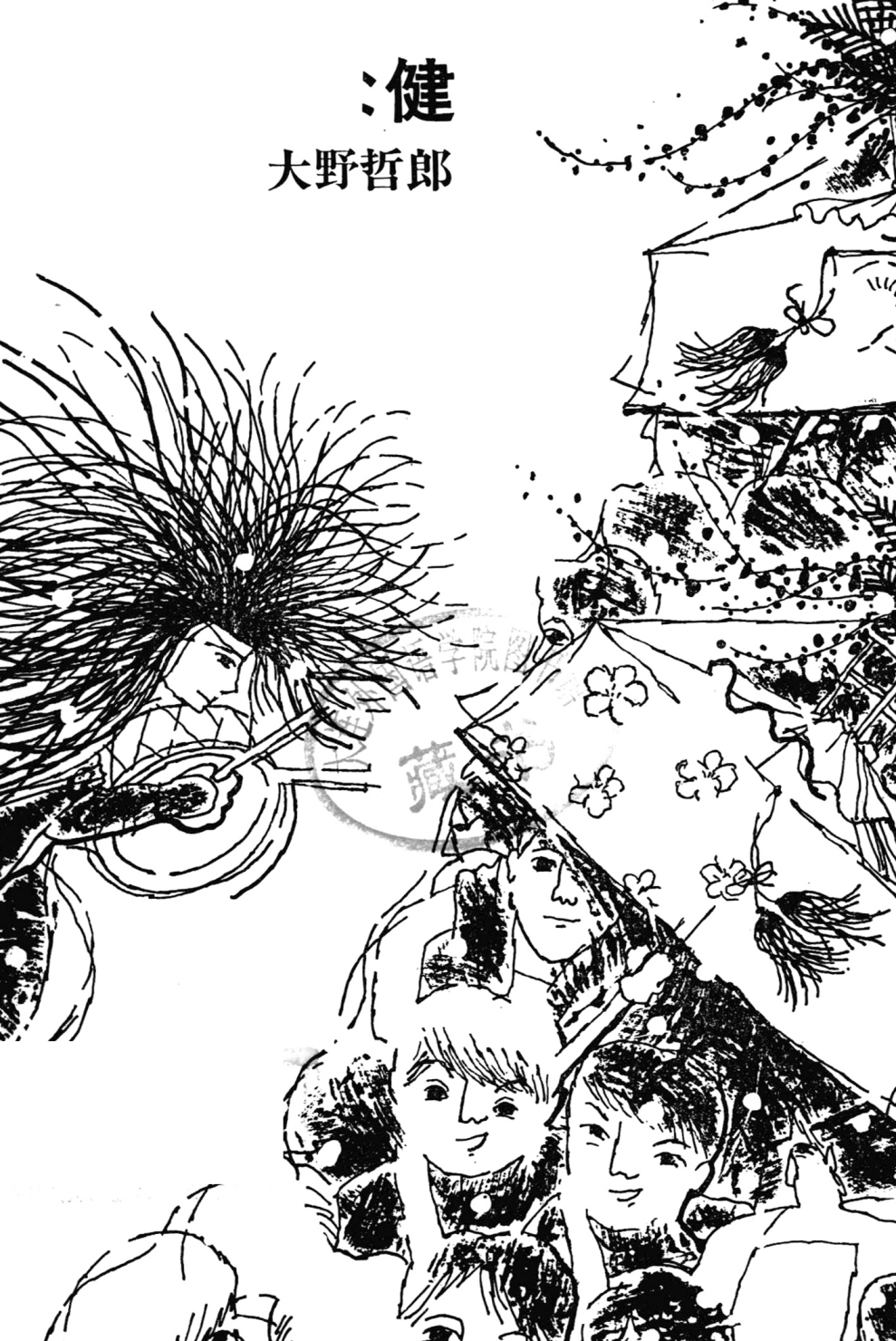
表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

製 本 小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに表示してあります

健

大野哲郎



もくじ

ナイフの魔術 ^{マジック}	6
ピョコの運命.....	35
負けるな、健.....	63
おばあちゃんの子守歌.....	91
憎しみには憎しみ ^{にく} を.....	125
父さんの暖かい手 ^{あたた}	159
ブレーキのこわれた自転車.....	171
大文字の火の遠く.....	196
新しい出発.....	219

混合リレー……………	236
二人だけの秘密 ^{ひみつ} ……………	262
春日若宮御祭り ^{かすがわかみやおんまつ} ……………	297
最後の戦い……………	330
あとがき……………	353

装幀・さし絵 稲川弘明

ま
け
る
な
健

ナイフの魔術 マジック

西陣にしじんの春は、やすらい祭りであける。

うらうらとかげろうのゆらめく町を、緋ひの衣ころもに、赤色、黒色の髪かみをふり乱みだした大鬼おおおに、小鬼こおにたちが、鉦かね、太鼓たいこをはやしながら舞まい踊おどる。

春の花々や、新芽あたらの吹ふいたヤナギの枝えだをかざりつけた風流傘ふうりゅうがさの下に、見物の人たちは、先を争って入っていく。

「花傘はながさに入ると、今年一年、悪い病氣にかからへん、入っていこう。」
隆りゅうにさそわれて、健けんは、風流傘ふうりゅうがさの下におされて入った。

やすらい花や、めでとう踊おどれ やーほい、やーほい

鬼おにたちの緋ひの衣ころものすそがひるがえり、踊おどりにあわせて、めまぐるしく動く赤と黒の髪かみの毛に、春の日ざしが、きらめいている。

ピー やすらい花よ よーはい チキチン

子どもたちは、笛ふえと鉦かねの音おととはやし歌を口まねしながら、飛びまわっている。

健は、鬼おにたちの踊おどりを夢ゆめのように見ている。

遠い見知らない国の祭りのようだ。

だが、まぎれもなく、健は、西陣にしじんちゅうがつかう中学校の制服、制帽せいぼうをつけて立っている。

西陣にしじんちゅうがつかう中学校一年6組、真田さなだ健けん。

「おれ、中学一年生なんだなあ。」

「そうや、お前とおれとは、友だちや。」

隆りゅうは、健の肩かたに手をおいた。

部活を終わって、健が校門を出ようとしたとき、

「おーい、健ちゃん。」

と大きな声で呼びながら、サブが走ってきた。袋かぐろに入れた竹刀しないにバッグを通して、肩かたにかついでいる。

桜田武、つづめてサブ、健より少しちびだ。女の子のように色が白くておっとりしている。健とは、何となくうまがある。友だちになれそうだ。

「いっしょに帰ろう……。」

「サブちゃんち、どこ。」

「今宮さんの御旅の近くや。遊びにきてんか。」

「健ちゃんの家は。」

「智恵光院鞍馬口の近く。」

「きのう、十三参りに行ってきたわ。」

「誕生日だったの?」

「十三になったら、嵯峨の虚空蔵さんへお参りして、知恵をさずけてもらうてくるんや。せっかく知恵をもらうても、渡月橋を渡り終わらんうちにふり向いたら、知恵を返さんならんちゆう話やし、必死やったわ。……嵐山は、サクラが満開や。」

嵐山、祇園、清水、京の町は、花のたよりでにぎわっている。船岡山のサクラも、

今が満開だ。

「虚空蔵こくぞうさんで知恵ちえをさずけてもろて、サクラの花の下でだんごを食べて、春はええわ。」

「お母さんで行ったの。」

「お父さんが運転して、うち中みんなで行ったんや。」

「いいなあ。」

「健ちゃんのお父さんは。」

「おーい、健。」

隆りゅうが走ってきた。山内隆やまのうちにし、みんな隆りゅうと呼んでよいる。隆りゅうのうしろに、丸顔まるがおでずんぐりしたからだつきの安田がしがたがっていた。

「健、落ち着いたら話したいことがあるんや。ぼくら、友だちなんやし。」

隆りゅうは、なれなれしく、健の肩かたをたたいて、

「たのんだで、ほんならまたな。」

と、腰こしぎんちゃくの安田をうながして、通りのむこうへ行ってしまった。

「話したいことって、何だろう。」

「学級委員長の選挙のことやろ、たぶん。」

「隆りゅうって、どんなやつ。」

「悪いやつやないけど、目立ちたがりやちゅうのか何ちゅうか、おやじが、弱電機関係の工場を経営しとるんや。部品のメーカーでは、ええとこいつてゐるらしい。市の高額所得者の最下位くらいには、いつも入ったはるわ。商工会の理事長もやったはるんや。」

「それは知ってる。おふくろが、商工会に勤つとめてるから。」

「健ちゃんとか、共かせぎなんか。」

「いや、おふくろだけや。」

「お父さんは。」

サブは、話を聞きたそうにしたが、健の顔色を見て、話題を元にもどした。

「隆りゅうは、学級委員長は、むりやろうな。村岡博史むらおかひろしちゅうすごいことができるのがいてるさかい。博史のおやじは、大学の医学部の教授で、博史は、小っちゃいころから、徹底的な英才教育を受けたそうや。勉強だけとちごうて、テニスでも、市の大会の少年の部



で、シングルに優勝したんやて。」

「サブちゃんは、どっちに投票する。」

「そやなあ……博史は、冷たいところがあるけど、隆のほうは、まだ何ちゅうんか、悪ガキいうんか、ガキっぽいところがあるしなあ。」

「とにかく隆は、おれたちタケノコ班の班長だしな。」

健は、隆に、何かわだかまりを感じている。母さんが、隆のおやじが理事長をしている商工会に勤めている。それを隆は、意識的に利用して、健に、高飛車に出てくるようなところがある。

その晩、隆から電話がかかってきた。

「学級委員長の選挙に立候補したり。」

「おれはだめさ。西陣の町にもなれてないし、第一、委員長ってがらじゃない。」

「けんそんなことあらへんがな。真田健は、積極的でリーダーシップがあるいうて、評判ええもん。小学校のとき、学級委員長やったことあるのんか。」

「六年生のとき。」

「ほんなら、ええ線いくわ。健が立候補したら、みんなで応援するさかい。」

「人のことより、お前はどうかんだ。」

「おれは、立候補せえへん。」

「じゃ、村岡博史に決まったようなもんだね。」

「村岡はあかんわ。規約の過半数もとれへん。自分は、天才みたいに言いふらしとるけど、だれも信用してへんわ。あんなやつが委員長になったら、クラスはバラバラになってしまふ。健、みんなのために立候補してくれ。」

「考えとくよ。」

「じゃーな、たのむで。」

隆の真意は、健にはわからなかった。

*

むこうを通る　じえもんさん

目も鼻も　赤うて

土間の仕事場で、おばあちゃんは、とんとん機はたを織りながら歌をうたっている。両足を交互こうごに動かしてたて糸を上下させ、右手でひをはじいて横糸を通し、おさを左手で寄せる。

老眼鏡をずり落ちそうにかけながら、おばあちゃんは、機はたを織っている。

母さんが、勤めから帰ってきたのは、六時前だった。

「おそくなったわね。すぐにご飯のしたくをするから。」

母さんは、急いでエプロンをかけると、台所へ立っていった。流しにつづいた調理台でマコが、タマネギをきざんでいた。

「マーちゃん、あとは、母さんがやるわ。」

「いいの、ずっとやってたんだし、なれてるもん。」

「でも、母さんがするわ。ここの台所は手ぜまだし。」

「お料理は好きよ。」

マコは、むきになって言った。

「それじゃ、お買物だけたのむわね。おばあちゃんの味かげんもあるから。」
母さんは、マコにかわって、器用にとんとんと、タマネギをきざみ始めた。

「もういや。」

マコは、突然、エプロンをまるめて、床にたたきつけた。

「エプロンは、ちゃんとして、しまっておくものよ。拾いなさい。」

「はい。」

マコは、母さんのうしろ姿をにらみつけるようにして、しぶしぶエプロンを拾いあげた。

「おじゃがをゆでて、皮をむいてくれる。」

マコは、だまってエプロンをかけると、ジャガイモをなべに入れた。

「それじゃ足りないわよ、四人分でしょ。」

「父さんと二人分しかやったことないもん。」